

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：34312

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13417

研究課題名（和文）食文化研究から読むMelville文学

研究課題名（英文）Melville and Food

研究代表者

大川 淳 (OKAWA, Jun)

京都ノートルダム女子大学・国際言語文化学部・准教授

研究者番号：50755288

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、Herman Melvilleの文学における「食」の表象と食文化に視座を置き、そこからMelville文学を再考する試みである。特に、Melvilleの第1作『タイピー』で描かれる食の表象が後続の作品に与えた影響を考察し、『タイピー』で描かれるカニバリズムとタトゥー文化が、中期作品に「食べる行為」と「書く行為」との接続性へと反映されていることについて分析した。また、タトゥーの、皮膚に記号を書き込むという点に着目し、諸作品における皮膚とテキストの関係性を明らかにすることによって、Melville文学における皮膚表象の重要性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Herman Melvilleの批評史において、食の表象の分析に着目したものはこれまであまりなされていない。しかしながら、現在に至るまでの文学研究の中で、「食」の主題が「文化」や「身体」の問題だけではなく、「階級」や「ジェンダー」、あるいは「宗教」といった、現代社会においても極めて重要である様々な主題と密接に関係している。

本研究においては、そうした変容する「食」の表象に視座を置き、Melvilleのカニバリズムやタトゥーといったポリネシア文化との邂逅が、いかに中期作品の中で変容し様々な主題と密接に接続しているのかを探究するものである。

研究成果の概要（英文）： This research aims at a rethinking of Herman Melville's literature through examining the representations of eating and food culture. Chiefly, it focuses on how the representations of an act of eating described throughout Melville's first novel, Typee, develop in his works published during 1850s. In Typee, Melville depicts cannibalism and tattooing in the Polynesian culture. In the works published in the 1850s, Melville reflects the motif of acts of eating and writing whereas both of the acts are related with each other in a metaphorical way. Besides, considering these aspects, this research secondarily reveals the significance of the motif of skin.

研究分野：19世紀アメリカ文学

キーワード：Herman Melville 食と文学 皮膚と文学 カニバリズム タトゥー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者の博士論文 “The King of the Cannibals’: A Study of Herman Melville’s Works” (2013年3月、関西学院大学大学院)と、2016年度に行ったニューイングランドの現地調査を引き継ぎ、Herman Melville 文学を食文化、及び作内における「食の表象」に着目し分析する試みである。具体的に研究開始当初の背景として次の点が挙げられる。

- (1) Nowman Kiell によって編集された *Food and Drink in Literature: A Selected by Annotated Bibliography* から明らかなように、「食」という主題から文学を紐解く研究としてはこれまで数多くなされてきた。Melville 批評史においても同様で、例えば *Moby-Dick* を “eating poem” として位置付ける Maggie Kilgour の書籍 *From Communion to Cannibalism: An Anatomy of Metaphors of Incorporation* や、19 世紀アメリカの食の産業と政治学的な視点から Melville の初期作品から中期作品を分析した Kathryn Cornell Dolan の書籍 *Beyond the Fruited Plain: Food and Agriculture in U.S. Literature, 1850-1905* などが挙げられる。またこの他にも、Melville 文学における酒に着目したの書籍 *Alcohol in the Writings of Herman Melville: “The Ever-Divilish God of Grog”* などが挙げられる。

このように、文学と食の関係性や、テキスト内における「食」の表象に着目する論考は、これまでの批評史においても多く見られるものの、Melville 文学だけを扱った書籍の中で、「食」の主題を中心的に据えて議論されているものは、ほとんど存在しない。

- (2) Melville 文学における「食」の主題は、これまで比喩的な意味を考察するテキスト分析と、新歴史主義的観点から、19 世紀アメリカの食文化事情から論じられてきたが、本研究は、これまでの批評史を渉猟しつつ、様々な主題に接続する「食」の性質を考察し、最終的に作品論に還元することを目指すものである。

研究代表者の 2013 年の博士論文では、Melville 文学における「食べる行為」を中心に分析し、そこからこの行為が比喩的な意味において「征服の行為」、「知る行為」、「一体化する行為」に分類できることを明らかにした。本研究は博士論文で考察したこの分析を踏襲するものであるが、特に「身体」と「書く行為」といった他の表象との接続性については論じ切られておらず、継続してこの課題を行う必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、Herman Melville の文学作品における「食」の表象が、他の主題とどのように接続し意味を構築しているのかについて検証することである。Melville 文学を特徴づけるものとして、捕鯨航海や、Polynesia での漂泊と他文化との邂逅などによって、Melville のイマジネーションの素地が作られたことが挙げられるだろう。Herman Melville の初期作品群では、捕鯨船での乏しい食糧事情や、Polynesia の島々のエキゾチックな食文化だけではなく、カニバリズム風習といった、当時の西洋社会にとって他者文化を代表する土着風習が描かれている。

一方で、産業資本主義社会が形成され、領土拡張が押し進められた時代における社会問題もまた Melville の関心から漏れることなく、舞台を海から陸へと移された 1850 年代の短編小説群では、そうした社会問題が、食料事情を通じて直接的に描かれている。しかしながら、捕鯨航海や Polynesia で涵養された「食」に対する意識は、初期作品群だけでなく、常に中後期作品においても通底している。1853 年に発表された “Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall-Street” の中で、産業社会において労働者が搾取される様子が、カニバリズムのイメジャリを通じて描かれていることはその証左でもある。

そこで、本研究では Melville 文学の初期作品群における「食」の表象を分析し、それらが後続の作品にどのような影響を与えているのかを考察する。具体的には、*Typee: A Peep at Polynesian Life* (以下 *Typee*) で描かれるカニバリズムとタトゥーの主題に着目し、後続の作品における「食べる行為」と「書く行為」にどのように反映されているかについて分析する。加えて、捕鯨産業やアメリカの食文化、また Polynesia 文化の調査を通じて、実際にどのような食の事情があったのか、またそれらの文化がどのような影響を Melville に与えたのかについて調査を行う。

3. 研究の方法

(1) テキスト研究および先行研究調査

本研究では、初期作品で描かれるカニバリズムとタトゥー文化が、中期作品に「食べる行為」と「書く行為」との接続性へといかに反映されているかということについて、テキスト研究および先行研究調査を実施した。具体的には、*Typee, Omoo; A Narrative of Adventures in the South Seas* などの初期作品に見られるカニバリズムやタトゥーにまつわる描写を分析し、*Moby-Dick; or, The Whale* (以下 *Moby-Dick*), *The Confidence-Man: His Masquerade* (以下 *The Confidence-man*) に散見できる現実的あるいは比喩的な意味における「食べる」という行為と、同様の意味における「書く」という行為の接続性に焦点を当て、研究を実施した。

(2) 実地調査 (New Bedford および Polynesia)

Massachusetts 州 New Bedford の Whaling Museum には、捕鯨航海日誌が多く所蔵されている。同博物館付属の図書館に在籍している司書 Mark Proncknik 氏の協力のもと、捕鯨船内における食糧事情や、諸島との交易の記録、さらにカニバリズムについての日誌の記述を検索し、当時の捕鯨産業の実情と、捕鯨船員の Polynesia 文化に対する姿勢について調査を行った。

また、Polynesia の Nuku Hiva 島に赴き、Melville の漂泊した痕跡や、Polynesia 文化の実情などについて、現地民によるガイドやインタビューを通じて調査を行った。尚、Polynesia での調査に先立ち、関西学院大学の橋本安央教授の協力のもと、Polynesia 文化にまつわる文献調査を行った。また実地調査においては、日本メルヴィル学会の牧野有通会長と共同で調査を行った。

4. 研究成果

南太平洋の土着風習であるカニバリズムとタトゥーは、他者性を象徴するものとして西洋社会の関心の的になっていた。Melville が Polynesia での漂泊の経験に基づいて書かれた初期作品は、西洋社会の関心を集めることとなったが、出版当時は単なる冒険譚として見なされていた。しかし、1921 年に出版された Raymond Weaver の *Herman Melville, Mariner and Mystic* を皮切りに、Melville revival が起こって以降、冒険譚としてみなされた物語の余剰の部分に光が当てられるようになった。たとえば、イギリス人文学者 D. H. Lawrence による、*Studies in Classic American literature* (1923) では、Polynesia 文化そのものの特異性というよりも、むしろそれに直面した Melville の心理的な情動に焦点が当てられ詩的に論じられている。それ以降の批評史においても、初期作品の虚構性や文学性については当然のこととして議論されており、単なる冒険譚という枠組みから漏れ落ちる「余剰の部分」における意義をあらためて問い直す必要はないだろう。

本研究では、そうした初期作品における主題となるカニバリズム文化を、後期作品にみられる「食」の表象へと発展する、一種の Melville の文学性、あるいは文学的イマジネーションの萌芽として位置づけるものである。これまでの研究代表者の研究において、*Typee* におけるカニバリズムの主題、あるいは「食べられる」という状態は、主人公 Tommo の「自己」が侵食されるという意味において、タトゥー文化との密接な関係を持つことを明らかにしてきた。具体的な主な研究成果としては、以下が挙げられる。

- (1) Melville の長編小説 *The Confidence-Man* における「食」の表象が、「書く行為」と接続していることに着目し分析した。テクストにおいて、詐欺師がポート・ワインを飲ませるという行為と、乗客の記憶を「上書き」するということが比喩的に描かれている(ポート・ワインに着目した批評家としては、Elizabeth Renker や Andrew Delbanco などが挙げられる)。この「食」と「書」の比喩的な関係性を踏まえ、最終的に信用詐欺師に、「書く」という author としての特権が付与されてことについて考察し、物語そのものがメタフィクショナルな構造を呈していることについて分析した。この研究の成果として、“The Impostor and the Imposer: The Fictionality of *The Confidence-Man*”と題した論文を執筆し、『英米文学』87号(関西学院大学英米文学会)に掲載された。
- (2) Melville の長編小説 *Moby-Dick* における、カニバリズム表象について分析した“The Devourer and the Devoured: Representations of Cannibalism in *Moby-Dick*”が *Sky-Hawk: A Journal of the Melville Society of Japan* 6号(日本メルヴィル学会)に掲載された。これまでの *Moby-Dick* 批評史において、ナルシズムの主題に着目した論考は少なくない。その多くが、Ahab の白鯨への復讐劇を、Ahab の自己をめぐる物語として位置づけ、Ahab と白鯨の鏡像関係を分析するものである。本論は、この批評史を踏まえ、Ahab の白鯨への攻撃性と、同種のを喰らうという、カニバリズム的欲望が仄めかされていることについて分析し、そこから Ahab と白鯨の鏡像関係に、己を喰らうという Ahab の自己破壊の性質を読み取ることができることについて論じた。
- (3) *Typee* で描かれるタトゥーにまつわる「皮膚」そして「書く行為」というモチーフは、*Moby-Dick* における様々な「皮膚」表象と、Ishmael の「書く行為」にまつわる描写に反映されている。Ahab が銚を打ち込むことによって白鯨を捕らえようとすると同様に、Ishmael は白紙にペンで文字を刻むことによって鯨の神秘を解き明かそうとする。Ahab の白鯨への追跡に見られる「喰らう」という欲望は、Ishmael の場合、「書く」ことによって心理を追求しようとする欲望に置き換えられ、ここに「食」と「書」の奇妙なパラレル関係を見出すことができる。しかし、Ishmael の鯨の神秘を解き明かす試みは、Ahab の復讐と同様挫折し、一層その解き明かせぬ鯨の神秘性が前景化される。この研究の成果として、日本英文学会関西支部大会シンポジウム『冒険の残滓——『ロビンソン・クルーソー』から 300 年』において、「『下書きの下書き』—メルヴィル文学とスティグマの表象」と題する発表を行った。

以上が、本研究の主な研究成果となるが、研究の過程において、「食」と「皮膚」の関係性が

顕著に見られたことによって、派生的に他の作家による文学作品における皮膚表象についての研究を行った。具体的には、Nathaniel Hawthorne の“The Birth-mark”論について、日本ナサニエル・ホーソーン協会と、International Poe & Hawthorne Conference において学会発表を行い、また Lafcadio Hearn の“The Story of Mimi-Nashi-Hôichi”論について、京都ノートルダム女子大学国際言語文化学部公開講座『小泉八雲 多文化の協奏—*Kwaidan* と怪談』において、パネルトークを行い、「文化の航跡」ブックレット16号（京都ノートルダム女子大学 国際言語文化学部 国際日本文化学科 「文化の航跡」刊行会）にその報告を上梓した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大川淳	4. 巻 62
2. 論文標題 The Impostor and the Imposer: The Fictionality of The Confidence-Man	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英米文学（関西学院大学英米文学会）	6. 最初と最後の頁 35-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大川淳	4. 巻 6
2. 論文標題 The Devourer and the Devoured: Representations of Cannibalism in Moby-Dick	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Sky-Hawk: The Journal of Melville Society of Japan	6. 最初と最後の頁 51-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 上原正博、妹尾智美、田島優子、大川淳
2. 発表標題 ワークショップ：「痣」を読む
3. 学会等名 日本ナサニエル・ホーソン協会第36回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大川淳
2. 発表標題 皮膚とテキストの表象から読むHawthorne文学
3. 学会等名 日本ナサニエル・ホーソン協会関西支部9月例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大川淳
2. 発表標題 Reading Skin: The Mark of Aesthetics in “The Birth-mark”
3. 学会等名 The International Poe & Hawthorne Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 服部典之、小林亜希、大川淳、橋本安央
2. 発表標題 「下書きの下書き」メルヴィル文学とスティグマの表象(シンポジウム:「冒険の残滓—『ロビンソン・クルーソー』から300年」)
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第14回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小泉凡、大川淳、堀勝博、須川いずみ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 「文化の航跡」刊行会	5. 総ページ数 53
3. 書名 「文化の航跡」ブックレット16 小泉八雲 多文化の協奏—Kwaidanと怪談—	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考